

## 「コリント教会へのパウロの手紙」のポイント

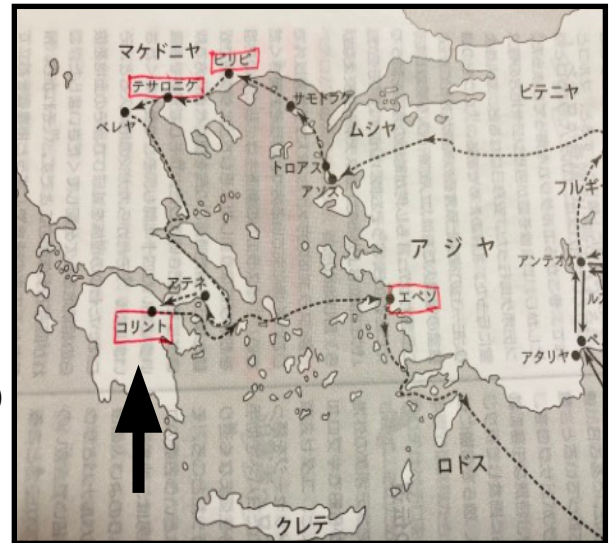
## 1 コリント教会への手紙のアウトライン

## A：教会の問題についての対処

- (1)教会の分裂について(1章10節～4章21節)
- (2)教会の無秩序な状態について(5章1節～6章20節)

## B：教会の質問に答える

- (1)クリスチャンの結婚に関する教え(7章1節～40節)
- (2)クリスチャンの自由に関する教え(8章1節～10章33節)
- (3)礼拝に関する教え(11章1節～14章40節)
- (4)復活に関する教え(15章1節～16章24節)



## 「コリント教会へのパウロの手紙」を読んでみよう

## 1 今日の聖書箇所：12章1節～11節

## 2 今日のポイント：賜物について

## (1)前回までの復習

コリント教会は問題の百貨店のような集まりでした。コリント教会が初代教会と言われるように、教会が始まって間もない頃の時代ですから、様々な主義主張、考え方、自己中心的な判断などが渦巻いて様々な問題を抱えていました。12章の前半では賜物についてパウロが語っています。クリスチャンには聖霊様から賜物という贈り物を与えられています。この賜物は創造主の聖霊様が各個人に与えられたもので、キリストの体である教会の為に用いるべきものでした。当時、コリント教会の人々は、それを自分を自慢する為に用いました。他の人よりも自分が優れた賜物を持っていると伝えたかったのです。パウロはそのようなコリント教会の人々に、賜物を与えてくださる創造主の為に用いるように訴えました。

## (2)みんな一つ(12～14節)

パウロは12章11節で「めいめい違った賜物を与えられる」と語りながら、賜物の多様性について語りました。12節以降は賜物と同時に(賜物を用いた)奉仕や教会を構成する人々の多様性について話が及んでいます。奉仕や教会員の多様性について語る前に、パウロは12節～13節で「ひとつ」という言葉を強調します。体をたとえにして、体という一つの大きな枠の中にそれぞれ器官が存在し、生きる事ができるように、クリスチャンはそれぞれ異なった部分が在りながらも、キリストの体である教会にあって一つということを強調しています。ですから、この共同体の中には、ユダヤ人でも、その他の国の人でも、奴隷でも自由人でも連なる事ができるのです。なぜなら、その共同体の中心は何かの思想やイデオロギー(政治・芸術・哲学や道徳などから構成される主張や観念)でもなければ、人物ではないからです。様々な背景・国・文化や考え方を超越するイエス様を中心とした共同体が教会だからです。パウロは賜物・奉仕の多様性を語る前に、キリストを中心とした1つの共同体に属している事を

強調しました。

### (3)皆が異なる存在と賜物(14~27節)

続いてパウロは14節で「実際、体にはいろいろなものがあって」という言葉を使い、1つ体の中に様々な器官がある事を語りながら、教会の中にも様々な賜物・奉仕・人々や働きがあることについて語りました。パウロは、創造主に与えられた賜物を主のためではなく自分の為に用いていたコリント教会の人々に対して、それぞれ違う賜物が与えられている多様性の大切さ、また様々な奉仕や人々がキリストの名の元に一つになる大切さをここで説いています。コリント教会の人々は失敗してしまいましたが、与えられている賜物に優劣はなく、奉仕や人々の中にも優劣を作ってはなりません。パウロは21節からそれぞれの重要性を語っています。特に見える部分だけではなく、見えない部分での働きや奉仕こそ重要だと語りました。見える奉仕は多くの人に褒められ、よくやっていると認められがちですが、見えない場所での奉仕や見えない場所で主に仕えている姿もとても大切だとパウロは語っています。

また、25節ではそれぞれ異なる賜物や奉仕が与えられている目的をパウロは説きました。「それは、体全体の中で分裂する事がなく、お互いにいたわり合うため」「体の1箇所が苦しめば、他の全ての箇所も一緒に苦しむ」「1つの場所が重んじられれば、他の全ての箇所も一緒に喜ぶ」と語り、お互いを励まし、お互いに苦しみを分かち合い、お互いの成功や努力を喜び合う事の大切さを語りました。

### (4)全てを結び合わせる大切なもの—愛—(28節)

パウロは最後に様々な賜物があるけれども、一番優れた賜物を求めるようにコリント教会の人々に求めました。その賜物については13章に詳しく記録されることとなりますが、この賜物を受け取る時に「これらの霊的賜物が生かされる道」となるとパウロは語りました。その大切な賜物は「愛」です。愛の賜物をいただく時、異なる賜物を持つ人を受け入れる事ができます。愛の賜物をいただく時、異なる奉仕を尊重する事ができます。愛の賜物をいただく時、他の人の痛みが自分の痛みとなり、他の人の喜びが自分の喜びとなるからです。

## 3 分かち合ってみましょう

教会は、もともと異なった背景の人たちが集まる共同体の為、一致する事が一番難しい共同体です。しかし、それを可能にするのがキリストを中心とした集まりです。異なる賜物が与えられ、異なる奉仕、異なる文化背景を持っていても、イエス様を中心とするときに一致する事ができます。そのキーワードが愛でした。私たちは愛を持って、周りの方々の賜物を認め、奉仕を尊重し、痛みを自分の痛みとして共感し、他人の喜びを共に喜ぶ事ができているでしょうか。誰かの奉仕を認めて励ましてみましょう。